

鬼滅の刃～桜の剣士～

ROLEX

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

鬼殺隊にある噂が流れていた。

曰く、その剣士の剣技はとても美しい

曰く、その剣士の実力は柱にも劣らない

曰く、曰く、曰く、曰く……

これは、腹黒い神様によつて鬼滅の刃に転生させられた1人の男の

物語

勢いに任せて書きました。

駄文だと思います。すいません

目

次

転生

最終選別 前編
最終選別 中編
最終選別 後編

色変わりの刀と初任務

13 10 7 4 1

転生

「何処だ？」
此処は

辺り一面
真の白な世界で俺の声が響く

「やあ！ こんなにちは化野（あだしの） 桜花君（おうか）」

後ろから急に一音を掛けられたので

後ろから急に戸を撞いたオカの手驚き
扱い返ると霧の手袋が失くされた
人が居るよう見えた。

俺がそう問い合わせると、霧の中から一人の人物が現れた。外見は中性的で男とも女とも読み取れる。急に現れたので警戒していると…「そんなに警戒しなくても大丈夫だよ」

笑いながら語りかにその後驚くようなどとを言つてきた

「和は君たちの言ふところの結構だ。死ぬなことは君は死んでしまつたのさ、ほら何か思い出せないかい?」

すると、突然頭が痛み始めた。

書店で本を買い、家に帰宅しようと歩き出す。少し歩き横断歩道が赤になつたので止まる。すると、歩きスマホをしていた1人の女性が赤になつていて、気付かず歩いていた。そこに運悪く、すぐそこまで迫つてくるトラックが見えたので

と、叫びながら走りだし女性を突き飛ばし

ドン!!

俺の身体に、とてつもない衝撃が来たのと同時に意識がなくなつた。

「思い出せたかい？」

神と名乗った人物が、頭痛に苦しめられていた俺に話し掛けてき

た。

「…俺が突き飛ばした女性はどうなった？」

まず、気になつたのはそこだつた。女性も死んでいたら元も子もないからだ。

「あの女性は足を捻つてしまつたが、命に別状はないよ。君が体を張つたお陰でね」

「よかつた…」

女性の安全を聞くと、体を張つた甲斐があつたと安心した。そして、今まで気になつっていた事を聞いた。

「ところで此処は何処なんだ？」

「此処は転生の間と言われる場所。何か善いことをした者のみが此処に来ることが赦される場所だよ」

「転生の間…」

転生… それは二次創作などで、よく聞いたことがある言葉だ。俺も実際に転生したいな」と、よく感傷に浸つていたが、実際に転生すると言われると頭が真っ白になる。

「ちなみに、おー… 私は何処に転生するのですか？」

「言葉遣いは気にしなくても良いよ。それで、転生する場所だつたね」何処に転生するのかドキドキしながら次の言葉を待つていると、神様が薬玉を出しそれを割ると…

鬼滅の刃

と、書かれた紙が出てきて

「鬼滅の刃の世界だよ」

こちらに向けて神様がニヤリと笑いながら、俺の転生する世界を教えてくれた瞬間意識がなくなつた。

「さて、行つたか。急にあの世界に行つて、すぐに死んでもらつては困るから」

神様が化野 桜花と書かれたホログラムに

物覚えが良い 感覚が鋭い 元柱で育手である者に育てられる

と、書き加え笑い出す

「クツッ！ クハハハハ！ 化野 桜花君。君はどんな物語を見せてく
れるのかな」

彼方を見ながら笑つたまま霧の中に消えていった……

最終選別 前編

目が覚めたら、ある夫婦の子どもになつており10年の月日が流れた。

ある日、母親に買い物を頼まれ、近くの雑貨屋に行つたが売り切れていたので少し離れた場所にある雑貨屋に買いに行つた。

頼まれていた物が多かつたため、家に戻つて来たときには太陽が沈んだ後であった。

ただいま、と言ひながら家に入つたが返事が無かつたため警戒しながら居間にむかつて歩いていると、何かを喰つている人物がいるのが見えた。

「おい！ 何をやつている！」

俺がそう問い合わせると、その人物は微笑を浮かべ振り返り手に何かを持ちながら答えた。

「喰つていたんだよ。お前の両親を」

「…は？ …何を…言つている…」

ふざけた事を言つていると思ったので、再び問い合わせようとしたが手に持つていてるのを見て一気に血の気が引いた。
それは両親の頭だった

「俺は幸せそうな家庭を見ると喰いたくなつてしまつてな。まあ運が無かつたんだよ。お前らは」

俺は恐怖のあまり腰を抜かしながら化け物から離れるように後退りした。しかし、その化け物な追い掛けるように俺に近付いてきた。「安心すると良い。お前もすぐに両親の元に行かせてやろう」
ゆつくりと俺に手を近づけてきた瞬間

斬！

化け物の首が胴体から離れた。

「なっ!? いつの間に斬られたんだ…」

そう言つて化け物は灰になつて消えていった。俺は呆然としてその光景を見ていると目の間に1人の男性が現れ、俺に問い合わせた

「大丈夫か？」坊主

「…あ…ああ」

すると、助けてくれた男性が急に俺を持ち上げ

「坊主、俺と来ないか？」

そう聞いてきたので思わず

「はい…」

と、答えたしまった

助けてもらつてから4年の月日が流れた。

あの時、助けてくれた男性は如月きさらぎ連夜れんやと名乗り俺は彼のことを師匠と呼び鬼を殺す為に必要である技術や知識等を学んだ。

師匠が教えてくれた呼吸は、桜の呼吸と言う派生の呼吸であり壱から捌まで型がある。

また、稽古中に全集中の呼吸・常中も出来るようになり、先週末に師匠から「最終選別に行くことを許可する」と言われ現在 藤襲山の麓にいた。

すでに、何十名か居るようだつた。

すると、白髪の女の子が喋り出した。

「皆さま。今宵は最終選別にお集まり下さり、ありがとうございます」最終選別は、藤の花の柄の着物を着た、白髪の少女の説明から始まる。

そして、同じ柄の着物を着た、白髪の少女と瓜二つの黒髪の少女が口を開く。

「この藤襲山には、鬼殺の剣士様が生け捕りにした鬼が閉じ込められており、外に出ることは叶いません」

説明を聞きながら回りを見渡した所、参加者は約三十名

「山の麓から中腹にかけて、鬼が嫌う藤の花が一年中狂い咲いているからでございます。しかし、これから先は、藤の花が咲いておりませ

んので鬼共がおります」

そして、白髪の少女は言つた。

「山の中で七日間生き抜く。——それが、最終選別の合格条件でござります」

少女たちは頭を下げ、

「——では、行つてらしやいませ」

それを聞いてから、俺は鳥居を潜り山の中に入る。

——これから、最終選別が開始される

最終選別 中編

—最終選別一日目夜—

俺は三体の鬼に囮まれていた。

「久方振りの食事だ……」

「大人しく喰われろ！」

「殺してやる！」

この様に三体とも殺意をこちらに向けて襲つてくる。しかし、俺は落ち着いて状況を見て戦術を練つていた。

(数は三体……ならば広範囲攻撃が可能な陸ノ型で！)

ヒュオオオ

肺に空気を目一杯取り込み陸ノ型を繰り出す。

「桜の呼吸 陸ノ型 桜吹雪さくらふぶき」

「なつ!? 切られたのか!?」

「もつと喰いたかつた……」

「やつと……死ねる……」

その言葉を最後に三体の鬼は灰になつて消えていった……

消えていつた三体の鬼を見ながら周囲に鬼がないことを確認し刀を鞘にしまつた。

「通用した……俺の剣が……」

自分の手を見ながら、感傷深く呟いた。

俺は未だに不安だったのだ。平和だつた世界から急にこの世界に来て俺は戦えるのだろうかと。しかし、先の戦闘で自分は戦えると言う事がわかり自信を付けることが出来た。

—最終選別三日目夜—

人を救いながら戦つていた俺は遠くから助けを呼ぶ声が聞こえたので、そちらへ急いでむかつた。すると、顔を青ざめながら助けを呼ぶ1人の男性がいた

「だつ……誰か向こうで戦っている人を助けてくれ……」

俺は、その人にどうしたのか聞くと彼は覚束無い喋りだつたが理由を聞かせてくれた。

彼が言うには、異形の鬼に襲われたが狐の面を付けた女の子に助けられたらしい。しかし、異形の鬼は強く女の子は勝てないと思つた彼は助けを呼びに此処まで来たのだと言う。

それを聞いた俺は

「了解した。この先だな？」

女の子の戦闘に手助けする事を決意し、戦闘場所を聞いた。

「あ……ああ。頼む、俺の代わりに助けてやつてくれ……」

その言葉を聞き、俺は急いでむかつた



戦闘場所に着き目にした光景は、幾多の手を操る鬼とその鬼に掴まれている1人の女の子だった。それを見にした瞬間

「桜の呼吸 壱ノ型 ひがんきくわ 彼岸桜」

女の子を掴んでいた手に向けて、桜の呼吸唯一の抜刀術を繰り出した。

手を斬り飛ばした後、女の子を庇うように前に出て

「大丈夫か？ 助けに来た」

そう言うと女の子は安心したのか涙を流しながら頷いたので、鬼に集中すると目の前の鬼は突如叫びだし

「ア、アアアアアア！ 誰だ俺の邪魔をする奴は！」

俺に向けて幾多の手で攻撃を仕掛けてきた。その攻撃を避けながら、戦術を練つていた。

(この手は斬つてから約3秒程で再生する……ならば、その手を全て斬つてから頸を刈る!!)

鬼は攻撃を回避し続ける俺に痺れを切らしたのか大振りな攻撃を仕掛けてきた時、駆け出し技を連続させて繰り出す。

「桜の呼吸 陸ノ型 桜吹雪」

斬！

「な……斬つたのか！ あの量の腕を！」

鬼が動搖している間に止めの一撃を放つ

「桜の呼吸 壱ノ型 彼岸桜」

そして俺は、鬼とすれ違い様に頸を斬つた

最終選別 後編

頸を斬り、灰となつて消えていくのを見届けた俺は刀を鞘にしまい、後ろにいる女の子に目を向けた。

女の子は腕から血を流していたので、自分用にと持っていた消毒液と包帯を使い応急手当をしていると女の子はお礼を伝えてきた

「あ……ありがとう。助けてくれて」

「気にするな。それよりも腕は大丈夫か？」

女の子に尋ねると、少し顔をしかめて答えた

「骨に輝が入っているかもしれない……」

それを聞き、改めて怪我をした腕を見ると少し青紫色に変色していた。

それを見て俺は周囲を見渡し程よい長さの枝を見つけ、その枝と余っていた包帯で怪我をした腕を固定した。すると、女の子は「慣れた手付きだね」と、苦笑しながら聞いてきたため「師匠に散々やられたからな」と、顔をしかめながら答えた。

手当てが終わり、怪我をさせた状態で放つておくのは忍びなかつた為、夜が明けるまで女の子を鬼から守つていた。

女の子は真菰と名乗り、自分の境遇について話してくれた。

鬼に親を殺されたこと。

鱗滝 左近次と言う人が助けてくれたこと。

その人から、呼吸や型等を学んだこと。

その他にも色々と教えてくれた。俺はその話を聞いていると俺と真菰の過去が似ていた為、俺の過去も話した。

「そつか……桜花の親も鬼に殺されたんだ……」

「ああ……だけど、今は師匠が居るから寂しくないんだ」

笑みを浮かべながら答えると、真菰もつられて笑みを浮かべ「私も鱗滝さんが居るから寂しくないよ」と言つた。

それから話していると真菰とは意気投合し、残りの四日間を協力して過ごすことにした。



—最終選別七日日夜

俺と真菰は今日で最終選別が終えるため山の麓に向けて、歩いていた。

麓に向かう最中、何体か鬼と戦闘する事になつたが特に被害など無く進んでいると

「桜花！ 太陽が出てきたよ！」

東の空が明るくなつていくのを見て、最終選別が終わりを迎えた事を実感する。

最終選別の説明を受けた場所に着くと、俺と真菰以外には誰も居なく呆然としていると

最終選別の説明をしていた女の子達が現れた

「お帰りなさいませ」

「おめでとうございます。御無事で何よりです」

俺と真菰の二人を労うかの様に言葉を掛けてくる。

「まずは隊服を支給させて戴きます体の寸法を測り、その後に階級を刻ませていただきます」

「階級は、甲（きのえ）・乙（きのと）・丙（ひのえ）・丁（ひのと）・戊（つちのえ）・己（つちのと）・庚（かのえ）・辛（かのと）・壬（みずのえ）・癸（みずのと）、以上十二段階ございます。今現在、皆様の階級は、一番下の癸となります」

「刀の方は、本日中に玉鋼を選んでいただき、刀が出来上がるまで十日から十五日掛かります」

「さらに、今から鎧烏を付けさせていただきます」

そう言つて、白髪の子が手を叩くと、俺たちの上から二匹の鴉が現れた。二匹の鴉が俺達の肩に停まるのを確認し、説明が続けられる「では、あちらから刀を作る鋼を選んでくださいませ。鬼を滅殺し、己の身を守る刀の鋼は、御自身で選ぶのです」

この玉鋼は、どういう基準で選べばいいのか分からぬが、俺は直感で選び、俺の鋼選びは終わつた。

その後、真菰も玉鋼を選び、隊服を受け取つて、最終選別は終わりを迎えた。

帰り際に真菰が「助けてくれて本当にありがとう。またね」と言つてきたので。俺も「ああ、またな」と言い師匠の家がある方向に歩き出した。

色変わりの刀と初任務

最終選別が終わり一週間が経過した。

俺は最終選別が終わっても毎日稽古をしていた。しかし、今日は師匠に早めに稽古を切り上げると言わされたので昼頃に稽古を止め師匠の家に向かつた。

師匠の家に戻ると師匠は誰かと話していた。

「只今戻りました。」

「戻つたか桜花。とりあえず座れ。先程お前の刀が届いたぞ」

「えっ！ 本当ですか師匠！」

「ああ。彼が届けてくれたぞ」

師匠が手を向けた先にひよつとこを被つた一人の人物が居た。

「はじめまして。化野殿。私は貴方の刀を打つた鉄穴森と申します」

「知つてると思いますが化野桜花と言います。その様な格好で、申し訳ありません」

俺は稽古が終わつた後だつた為少し汚れていた

「構いませんよ。貴方の師匠である如月殿から何をやつていたのか聞いておりますから」

すると、鉄穴森さんは木箱を俺の前で取り出し、蓋を開け、中から日輪刀を取り出す。

鞘の色は薄い青色で、柄巻は橙色。刀を握り、鯉口を切り、ゆつくりと抜き放つ。

「さあ 刀の色が変わりますよ」

——日輪刀は、別名“色代わりの刀”と呼ばれ、持つ者によつて色を変えるらしい。だが、才が無ければ色が変わることはないという。

すると、俺の手にした刀の刀身が緩やかに色付けていく。

「綺麗な桜色ですね～」

鉄穴森さんの言葉を聞き、俺は色が変化したことに安堵していると鉄穴森さんは立ち上り

「それでは刀を渡したことですし失礼させていただきます」

そう言つて玄関に歩いていくので、俺は鉄穴森さんに

「この刀、大事に使います。本当にありがとうございました」と、お礼を言うと鉄穴森さんは

「刀は物と同じで、大事に扱つてもいはずれは壊れます。その時はまた、私があなたの為に刀を打ちます。こんなことでしか化野殿を支える事は出来ませんが、どうか一秒でも長く生き、一人でも多くの命を救つてください」

「はい！」

感動に震える心が胸の内に温かな感情を流し込む。

そして誓う。この刀で、技で、悪鬼を滅してみせると。

鉄穴森さんが帰つてから暫くすると一羽の鴉が家中に入り
「カアー！ カアー！ 化野桜花ア！ 任務だア！ 任務だア！ 場所は北北東オ！ 北北東オ！ ある集落で、夜中次々と人が消えていくウ。至急向かわれたしイ！ 向かわれたしイ！」

「任務つ……！」

ついに転がり込んだ初任務の伝令。

途端に凜々しい顔つきになつた俺は師匠へと振り向けば、普段通りの厳めしい顔つきの師匠が無言で頷いた。

「つ……行つてきます！」

一刻も早く現場へ。

俺は逸る想いのまま飛び出した。



任務場所に一日掛けて向かい、昼頃に件の集落に到着した。

俺は近くにあつた飯屋で昼食を食べながら、お店の店主に最近奇妙なことはなかつたか聞くと

「そういえば、近頃夜中に人が消えていると言つ話を聞いたなあ」「本当か！ 是非その話を聞かせて欲しい」

有益な情報が手に入ると思つたので、店主の肩を掴み情報を教えてくれと頼んだ。

店主はいきなり肩を掴まれたので驚いていたが、俺の真剣な様子を

見て只事ではないと感じたのか情報を教えてくれた。

店主の情報曰く

・二週間前から人が消えている。

・消えている人達は共通して、ある森の中で消えている。しかし、昼間にその森に行つても帰つてこれること。

・熊かと思い、桑や鉈等を持ち討伐に向かつた五名がまだ帰つてしまつてのこと。

俺はそれらの情報を聞き、その森に鬼が居ると考えた。店主にお礼を言い、昼食と情報の分のお金を払い店から出た。

店を出た後も情報を集めていると、いつの間にか夕方になつていた。俺は、道行く人から聞いた情報によりその森に鬼が居ると確信した。

森の中

「ここが鬼が出る森の中……すぐ血の臭いがする……」

血の臭いが濃い方に歩いていると、突然前から砂のような物が飛んで来たので俺は木の枝に飛び乗つて、それを避けた。その数秒後に飛んでいった方向から何かが倒れた音がした

飛んでいった方向を見ると一本の木が倒れていた

(なんだ……今のは……)

警戒を高めていると前の方から声が聞こえていた。

「へえ 今のを避けるか。君、何者だい?」

声がする方を見ると、黒い砂のような物を宙に浮かしながら歩いてくる一人の人物が居た。

「俺は、今からお前の頸を斬るものだ!」

「僕の頸を斬る? あはは……面白い冗談を言うね。なら、これは避けられるかな!」

血鬼術 砂鉄砂嵐

血鬼術——鬼が持つ不死性や怪力とは別に、各個に発現する異能の力。弱い鬼は持ち合わせない能力だが、人を多く喰つた鬼や十二ヶ月など一定以上の実力を備えた鬼に発現する。

師匠から血鬼術について説明を受けていたので、目の前の鬼は少な

くない人数を喰らっているのがわかつた。

鬼を睨んでいると、目の前から無数の砂鉄が飛翔してきた。
相手の攻撃を避けながら戦術を練る

(攻撃 자체は余り脅威ではないが……範囲が広い!)

「どうしたの? さっきから逃げてばつかだけど」

敵の煽りを無視しながら、さらに思想に耽る

(被弾覚悟で壱ノ型で殺るか?)

そこまで考えていると、急に砂鉄の嵐が止んだ。

「本当に戦う気があるの? つまらないよ」

鬼は俺を見下しながら言つてきたので

「本当に当てる気があるのか?」

俺がそう煽ると、鬼は顔を赤く染め

「もう死ねよ」

血鬼術 砂鉄死槍

すると、鬼は手を上に挙げると砂鉄が集まり大きな槍を作った
「つまらなかつたよ。お前」

そう咳き、槍を投げた。しかし、それは俺を貫くことはなかつた。
なぜなら

桜の呼吸 伍ノ型 花霞

黒槍を断ち切つたからである。鬼は驚愕した。

「なつ! き・斬られた、僕の自信作を!」

慌てて、もう一度黒槍を作ろうとしたが

「遅い!」

桜の呼吸 壱ノ型 彼岸桜

斬!

鬼の頸は宙に舞い、灰となつて消えていった。



鬼が灰になつて消えてから少し経つた後、鴉が俺の頭上を舞い次の
任務を教えてきた。

「カアー! 任務ゴ苦勞オ! ゴ苦勞オ! 次の任務は南西工!

南南西エ！」

その知らせを聞き、俺は南南西に向かい走つていった…